

## Contents

- 02 S☆F創設の理念・思想
- 04 10年の歩み
- 14 東京遠征
- 15 九州遠征
- 16 チアリーダー“ブルークイーンズ”
- 17 中高年特有のリスクに留意を
- 18 試合ルールの変遷
- 20 データで振り返るS☆F
- 22 鳥内秀晃氏からのメッセージ  
(関西学院大学アメリカンフットボール部監督)
- 23 寺本哲夫さんインタビュー  
(カウカウマスター)
- 24 歴代担当マネージャー
- 25 S☆Fへの想い(メンバー自己紹介)
- 48 編集後記



S☆FIGHTERS代表  
**三浦 智**

皆さん、こんにちは。

S☆FIGHTERS(シニア・ファイターズ)代表の三浦です。この度、創部10周年の記念冊子発行に当たり、一言御礼を述べさせていただきます。

関西学院大学体育会アメリカンフットボール部が運営するS☆FIGHTERSは、第3フィールドが完成した事を受け、人工芝の素敵なグラウンドを肌で感じ、健康の維持・増進を図る目的で、関西学院の卒業生で無くとも、過去にフットボール経験が無くとも、日曜日の午前中に体を動かしたい気持ちのある方が、自由に参加して頂ける開かれたクラブチームです。また、対外試合は行わず(東京及び大阪のチームとの交流は持っています)、独自のルールの中で「フットボールごっこ」を楽しんで貰える環境を創っています。そんなチームが10年前に小野ディレクターの構想のもと発足しました。チームの代表を依頼された時は、不安だらけでスタートしましたが、年々参加者が増え、毎年約150名の方が登録して頂けるチームに育ちました。人工芝の素敵なグラウンドには、毎回約60名~70名の参加者で賑わう様になりました。隣では、同時間帯Blue Knights(ブルーナイト:小学生を対象としたフットボールチーム)が練習を行っており、第3フィールドは正にフットボールフィールドと化します。これも偏に皆さんが、運営側の意思をご理解して頂き、更にはご協力して頂いての事と大変感謝しております。

フットボール人口が少くなりつつある昨今ではありますが、何時までも「フットボールごっこ」が続けられるよう、私なりに努力して参りたいと思いますので、今後とも末永くお付き合い頂ければと思います。

最後になりましたが、この様な環境を提供して頂いている関西学院、アメリカンフットボール部事務局、そして、現役のマネージャーに感謝して、挨拶とさせていただきます。

# S☆FIGHTERS

10th Anniversary

Safe, Slow, Fun!

シニアファイターズ創設から10年の軌跡



中高年を主な対象としたタッチフットボールクラブ「シニアファイターズ(S☆F)」を2007年に立ち上げたのは10年が経った。2016年度春の登録者は143人。過去の登録者を合わせると活動に参加した人数は累計で382人(07年参加者数不明の為、08以降での集計)にも上る。その素晴らしさや魅力について多くの方が小誌に記すと思うので、創設のすつと前の段階から構想してきた企画者としてS☆F誕生に至る道程を個人的な経緯を交えてここに記しておきたい。

チーム創設の直接のきっかけは、関西学院大学アメリカンフットボール部(以下、ファイターズ)にとつて念願だった人工芝のフィールドが2006年度に完成したことである。慣れ親しんだ土のグラウンドの上に、人間福祉学部の校舎(G号館)が新設されることになり、キャンパス北部に隣接する場所に練習フィールドを移転することになったのだ。

甲山の麓にできた「第3フィールド」は高い山々に抱かれ、春先の陽光に恵まれた日は青空と木々の新緑で晴れ晴れとした気分になった。選手たちの心境にも大きな変化が現れた。グラウンド整備から解放され、雨天でも泥まみれにならずに練習ができる。特にQB・WRは練習が終わってもパスの練習を申しそうに延々と続けるようになった。

選手だけではなく、私自身もボールを投げたり受たりしたくても体がうずうずし、転んでも痛くないし、汚れることもない。我慢できずに年下のコーチや現役選手を走らせて高校生のようにキヤッチボールに興じた。いつしかその楽しさ、気持ちよさを独占するのではなく、多くの人に味わってほしい、と思うようになった。それが創設に踏み切る契機となった。ただし、中高年のタッチフットボールクラブを創るといふ構想はすつと以前から温め続けていたもので、話が時を遡ることを許してもらいたい。

10年以上が過ぎた2005年、4年連続でリーグの覇権を立命に奪われ、アシスタントディレクターの宮本、石岡両氏らと立ち上げたのがファイターズ・フアンド・プロジェクト(FFP)だった。ライバルとの大きな環境差をどのように埋めていこうか。その中でも最重点課題としてプロコーチ雇用の費用をどうやって捻出するかを主題に、広告代理店やスポーツマネジメントに近い分野のOBらとプロジェクトチームを結成して議論を始めたが、次第にテーマはファイターズの将来構想やあるべき姿(ビジョン)に移っていった。

最終的にたどりついた結論は、ファイターズの社会的価値を高めることだった。チームが社会(例えばフットボール界)に貢献し、多くの人に価値を提供することが、長い目で見て多くの有形無形の支援を得るための大前提と考えた。勝つためにこそ、ファイターズを「素晴らしクラブチーム」に育てることが必要だ。その方策の一つとして、すつと温めてきた構想を粗上に乗せた。中高年のためのタッチフットボールクラブ(S☆F)と小学生らを対象としたフットボールクラブ(ブルーナイツ)の創設である。

社会には、利益を最優先する営利組織と、相互扶助を基盤とした共同体という、原理のまったく異なる二つの形態がある。ドイツの社会学者F.フーニエスはゲゼルシャフト・ゲマインシャフトとして概念を整理した。

「経済」合理性と効率性を追求する前者の価値が社会に浸透する過程の中で、並行して地域自治会や家族等の共同体の力はすつと弱まってきていくことは多くの人が指摘している。高度成長期は会社が疑似家族的な役割を果たしてきたがそれもバブルから20年の間に急速に失われつつある。会社での仕事は競争の激化と効率性の高まりが否応なく進み、我々は日常から強い不安を抱えるようになっていく。そうした社会の地殻変動が我々の人生を息苦しくさせている。今の社会は物質的・経

私は関学卒業後の1985年に朝日新聞社に入社し、1993年に退職するまでの多くを東京本社運動部でスポーツ記者として過ごした。その最後に担当した連載(1993年1月頃)が「地域スポーツクラブのススメ」だった。

当時はバブル経済が崩壊し、各競技の実業団チームの廃止が相次いだ。日本のスポーツを根底で支えてきた学校のクラブ活動でも教員が負担に耐え切れず休部する例が増えていた。百年構想を掲げてリーグが開業する少し前である。

その頃、運動部記者の中でも私だけが文部科学省の生涯スポーツ課に通っていた。新聞のスポーツ面を見れば分かるとおり、世の中でスポーツと言えば「勝った」「負けた」が関心の中心である。しかし、スポーツには、勝つことをめざす「競技スポーツ」だけでなく、その対極として、いつでもどこでもだれでもが参加できるスポーツの在り方として「Sports for All」という概念がある。勝敗にこだわらずに、スポーツを楽しむこともそのものを大切にする。そうしたスポーツの在り方と価値について欧州の事例等を交えて取材したことでも、スポーツを見る眼が大きく変わった。

その両方の要素を併せ持つのが欧州のスポーツクラブである。サッカーが中心だが、トップチームだけでなく高齢者から子供までがいろいろな競技をレールに合わせて楽しむ。大人がスポーツの後でビールを飲みながら仲間と語り合えるバブも備えている。ファイターズをというよりは関西学院大学体育会全体をそんなクラブ形態にしたいと夢想していた。

93年に母校に職員として戻ってコーチを始めた頃はすつとでもりかかっていたと思っていたが、関西学生リーグの戦いはそんな余力をもつて取り組めるものではなかった。仕事をしながら京大、立命と敵し争いに勝利するにはすつと時間を注ぎ込んででも足らなかつた。

経済的に豊かだが、それは人生の営みとして本当に豊かなか? 豊かになる方向に進んでいるか? という疑問を我々は拭えずにいる。そのためにも価値観のバランスを取るために共同体的なものの再生が我々には必要なのように思う。では、何をもちつて共同体的なものを築くか。その頃に堺屋太一氏の著作「東大講義録 文明を解く」を読んだ。官僚時代に1970年大阪府博をプロデュースし、「団塊の世代」の名付け親でもあった同氏は、社会の将来を見通す洞察力において稀代と言え。堺屋氏は、日本は近代工業社会から知能社会(Knowledge Value Society)に移行しつつあり、そこでの価値観と共同体の在り方に言及していた。日本人(特に男性)は戦後、職業職場を共にして強い帰属意識を持つ「職社会」を生きてきた。それが崩壊し始め、人びとが各種の「好み」によって共同体構造を持つ「好社会」へと変化するだろうと予測していた。

「好きなこと」によってつながり、社会的な地位など関係なく、損得なしで付き合える人たちの集まりが、新たな共同体として我々の生活の中に必要だと考え始めていた。こうした理念に基づいてS☆F創立を企画し、2007年に第1回の練習を開いた。

初回の参加者は私を含めて8人だった。その直後に神戸新聞が記事にし、「フットボールの未経験者も歓迎している」と書いてくれたことが大きかった。「すつとファイターズに憧れていたけれどプレースタイルでも自信がなかった」「あの橋本のボールを投げてみた」と思っていたがもう自分の人生の中では機会はないかと思っていた。初年度の参加者の大半はそんな「素人」の方々だった。ファイターズファンだけではない。京大、関大、近大、日大等のファンの方々もいる。例外的に小学生や中学生も交じっている。女性も一緒にプレーしているし、30歳代から60歳代までいろいろだ。そして、それがS☆Fの性格を

# “Sports for All” の理想をめざして

## —— シニアファイターズ創設の由来

x= 小野 宏 (S☆Fファウンダー)



決定つけた。

運動不足の中高年たちがまずストレッチをし、軽く走り、ボールを投げ、捕る。字にすれば退屈極まりないように見えるが、それだけでみんな夢中になった。怪我をしないように、8割以上で走らないことをルール化し、接触をなくした。安全、健康、そして楽しむことを最優先し、競争や勝利という価値は相対的にはすつと低く位置づけた。それぞれ年齢、性別、運動能力に応じて楽しめる。そのためには勝ち負けにこだわらない。うまいもへたも包摂する。だから、5人対5人の実戦形式の練習を始めるまでに3年半かけた。

このようないれば、フットボールは、ファイターズのような競技スポーツの在り方とは根本的に異なるが、これこそがS☆Fの核となる価値である。

3月から7月初旬と、9月から12月初旬。日曜日の午前10時から12時まで。暑さを避け、寒さから逃げて、ゴルフデニウイクは日程からはすつと、雨天はもう半年中止。このため、実際には1年52週のうち半分も開催できているかどうか。参加は自由。登録費はほぼ傷害保険の費用だけ。終われば有志がいつ

も大学正門前のスバゲテイルストラン「Kenan」で飲み会を開いている。さまざまに経歴の人たちが新しい輪を作って人生の付加価値とつぶべき豊かなS☆Fライフを満喫している。

いま第3フィールドの日曜日は、午前中にブルーナイツとS☆F IGHTERS、時折中学部が練習し、正午を過ぎるとファイターズの部員たちがオジタマの練習に集まってくる。選手たちはオジタマたちの熱狂をあきれながら少しづつやまそうに眺めている。まさにフットボールの「Field of Dreams」と言える光景である。

次の10年には、できる範囲でこうした営みをゆつくりと各地「各大学」に広げていければと夢見ながら、少しづつ構想を練っている。これも多くのの人たちとDreamを共有するところから始まるのだらう。

理念を述べたが、S☆Fは代表という大役を引き受けてくれた三浦智氏の人柄と責任感なくしてこまめに来ることはできなかった。深い感謝をここに記したい。また、石田さんをはじめ代表の方々のご尽力にも謝辞を申し上げる。